

社長交代に合わせた法人保険プランニング

— 3世代にわたる事業承継の方法 —

社長一代で会社を大きくしてきた中小企業の多くが、世代交代の時期を迎えつつある。だが事業環境も価値観も多様化した今日、従来のように親から子へとスムーズに経営権を移行できるとは限らない。さまざまなケースに柔軟に対応する上で、法人保険の活用が役に立つ。

顧客プロフィール

岸谷将記◎60歳

岸谷産業・会長

電子機器関連製造業を興して40年。積極果敢に業務を拡大し、年商10億円、従業員100人までに育て上げた。息子の健児が自分の意志で入社してきたのを機に、会長に退いた。息子が社長に昇格するまでの中継ぎとして、おいの祐二を新社長に据えた。

おい 小鈴祐二◎43歳

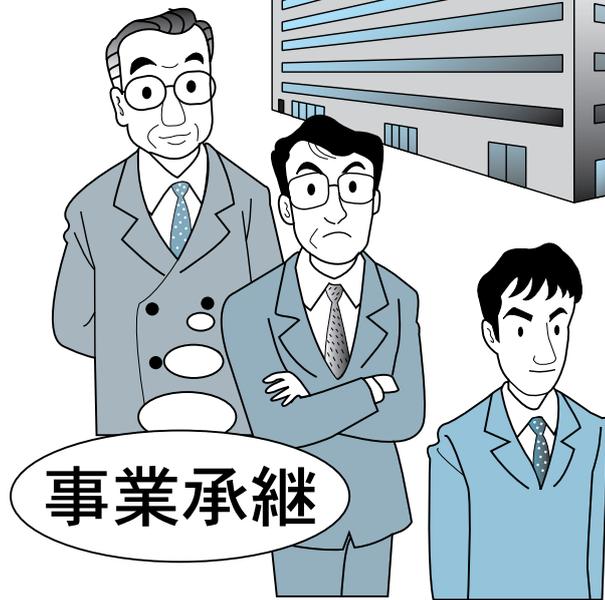
岸谷産業・新社長

この20年、会長である将記を支え、従業員とも良好な関係を築いている。今回、社長に就任するに当たり、株式保有の状況、事業資金借入れに対する個人保障などを見直したいと考えている。

長男 岸谷健児◎28歳

岸谷産業・社員

会長の息子。岸谷産業の元請けである大手企業で営業・生産管理業務を経験後、父親の跡継ぎになろうと考えて入社した。



事業承継

西山慶久◎43歳

財務コンサルタント。保険代理店業も行っている。不動産デベロッパー、住宅メーカーのほか、銀行や各種士業と連携し、包括的な経営コンサルティングを実践している。



今月のTOP

会長の心配

財務コンサルタントの西山は、年に数回、商工会議所のセミナーで講師を務めている。ある日、「退職金制度の変化と企業改革の方向性」というテーマで中小企業の幹部に向けて話をしたところ、最前列で熱心に聞き入っていた男性が手を挙げて質問を投げ掛けてきた。

「わたしの会社では適格退職年金を導入しています。最近では正社員以外にアルバイトや派遣社員の比率が増えてきて、退職金制度をどこまで保持すべきか判断しかねているんです。どうしたらいいでしょうか」

これが岸谷産業・小鈴祐二との出会いだった。相談を受けた西山は、その後1年間にわたって岸谷産業に通い、従業員の退職金制度改革を手掛けた。社長の岸谷将記は西山の仕事ぶりに大きな信頼を寄せ、「また相談事があったら連絡するよ、よろしく」と声を掛けてくれた。

先週、その岸谷社長から久しぶりに電話が入った。

「実は、息子の健児が入社したのをきっかけに、わたしは会長に退くことになった。健児の社長昇格までの中継ぎとして、おいの小鈴祐二が新社長に就任するよ」

社長の右腕として活躍してきた祐二が新社長になるなら、何も心配はないだろう。ところが、電話口の声は心なしか不安そうだ。ともかく面談のアポイントを取り、詳しい話はそこで聞くことにした。

3世代にわたる事業承継の方法

数日後、岸谷産業を訪問した西山を待っていたのは、会長の思いつめた表情だった。

「健児がこの会社の後継者になりたいと考えて入社してきたことは、素直にうれしい。だが息子だからといって、無条件に社長にするつもりはないんだ。その資格があるか否かは、わたしなりにしばらく見極めたいと思っている」

会長らしい堅実な考えだ。西山は、じっと耳を傾けていた。

「今度社長になった祐二は、20年間わたしの傍らで業務を遂行してくれた。経営のイロハも伝授してきたので何の心配もない。それに今回の人事を、健児に社長職を引き継ぐまでの中継ぎと理解してくれている点には、本当に頭が下がる思いなんだ」

「でも、何かお悩みがあるのですね？」

「ああ。もしかしたら健児に社長の素養がないということも考えられる。そのときはこのまま祐二に社長業を続けてもらって、その先の後継者選定も任せたいのだ。」

そこで、彼に会社の株式をある程度保有させたいと思っている。これは祐二の要望でもある」

続けて会長は、ここ7年くらいで完全に引退するつもりであることも明かした。

「もし息子が社長にふさわしいと分かったら、祐二との交代をどのタイミングで行うのがいいのかも考えなければならぬ。どうだろう、相談に乗ってもらえないだろうか」

会長はこう言うものの、将来はやはり息子の健児に後を継がせたいのだろう。そうなると、会長、新社長の祐二、そして息子の健児という3世代にわたる社長交代を念頭に置いたプランニングが必要だ。

西山は内心、戸惑った。仕事を依頼されるのはありがたいが、この話は自分には少々荷が重過ぎるのではないかな。

だが面談後、廊下で出くわした新社長の祐二が笑顔でこう話しかけてきたに至っては、観念せざるを得なかった。

「西山さん。岸谷産業の面倒をこれからもずっと見ていくのは、もう宿命ですね。今後ともよろしくお願い申し上げます。ワハハハ」

そのまま、祐二に飲み連れて行かれた西山の記憶は、それ以降プツリと途切れてしまった。気がついたら、再び岸谷産業へ通う日々が始まっていた。